

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会
ニュースレター

1991 8.1

9

情報知識学会事務局 発行 〒101 東京都千代田区和泉町1番地（凸版印刷㈱内） TEL03(3835)5550 FAX 03(3839)6061

1991年8月1日をもって、情報知識学会の事務局が移転いたしました。
詳しくは本号2ページを御覧下さい。

編集幹事の御紹介

この度ニュースレターの編集幹事として新たに、中嶋二一（奈良大学）、曾我部秀明（三菱総合研究所）、永村真（日本女子大学）、川添良幸（東北大学）の4氏に御就任戴きました。又学会誌のほうから芦崎達夫（日本科学技術情報センター）氏にも御協力頂きます。これで社会科学、自然科学、人文科学と揃い、学際的な立場から、情報知識全体をカバーする体制が出来上がりました。これらの方々を通じて学会のネットワークの充実と拡大を計って行きたいと思えます。会員の皆様も気軽に情報提供をして下さい。

情報知識学会は既存の学問枠にとらわれない自由な学会というところに存在意義があります。現在様々な分野で蓄積されつつあるデータ・知識の管理はもとより、コンピュータに入力する前の「いったい何を情報として伝達すべきか？知識とは何か？」といった問題について皆様の御意見をお聞かせ下さい。特集記事を組みたいと思っております。私論、暴論、大歓迎です。

長瀬真理

目 次

編集部より	1
事務局移転のお知らせ	2
SGMLによる学会誌の出版	3
新刊紹介 --- 名和小太郎著『電子メディアとの交際術』	6
ウィトゲンシュタイン・テキスト・DBを試用してみた	7
コンピュータと数学教育	8
電子化辞書リスト	10
学会紹介「記録管理学会」	12
情報学シンポジウム	14
CTI（コンピュータと教育）リスト	15
CODATA 部会より	17
情報知識学会誌への投稿について	20
「情報知識学会」ニュースレター執筆要項	21
学会カレンダー	22
第2回担当者会議議事録	23
編集後記	24

事務局移転のお知らせ

1991年8月1日をもちまして、事務局が下記に移転いたしました。事務引き継ぎ等で、論文誌、ニュース・レター、会費納入のお知らせ等の郵送事務が遅れ御迷惑をおかけしております。今後は新事務局にお問い合わせ願います。

住所：〒101 東京都千代田区和泉町1番地 凸版印刷（株）内
情報知識学会事務局
電話：03（3835）5550、FAX：03（3839）6061

本会の目的

情報知識学の振興を目的とし、データ・情報・知識に関する諸問題、例えば、
（１）基礎理論（知識の情報化、知識及び情報の構造、分類、モデル、組織化など）
（２）蓄積（データ・知識・資料の収集・整理、データの評価・管理など）
（３）表現（言語、ターミノロジー、加工・変換）
（４）流通（標準化、案内、知的所有権など）
（５）応用（文献情報管理、データベース、知識ベース・システムなど）
について、会員間の研究発表、意見交換を支援する。

主な事業

研究発表会：シンポジウム等の開催
ニュースレター：年6回（隔月発行）
論文誌：情報知識学会誌の発行（SGML適用出版物）
部会・研究会：CODATA部会、人文・社会系部会の開催

特典

ニュースレター・学会誌の無料配布
ニュースレター・学会誌への投稿
研究発表会での発表
研究会・部会への参加
関連学会の事業へ会員価格で参加

申込手続き

申込手続きは、入会申込書に記入の上、お送り下さい。
会費は、暫定的にこれまで通り郵便振替用紙（東京2-366028）によりご送金下さい。
入会申込書等は、上記の情報知識学会の新事務所にお申し出下さい。なお御希望の方には昨年度発行された「情報知識学会学会誌 創刊号」（消費税込み 1,800円）をお分けいたしております。事務局にお問い合わせ下さい。

SGMLによる学会誌の出版

SGML懇談会総会の事例紹介から

図書館情報大学 石塚英弘

・前書き

過る6月27日、SGML懇談会の総会が行われたが、その中の事例紹介の所で、SGML(Standard Generalized Mark-up Language)を使った学会誌の出版について報告する機会があった。そこでは、情報知識学会誌のを中心、著者が関わった他のプロジェクトも含めて紹介した。また、その経験を基に、SGMLへの一層の期待を述べると共に、SGML関連ツールの充実と普及をSGML懇談会に要望した。これらの事柄は本学会に関連が深いことなので、その内容を簡単に報告しておきたい。

1. SGMLによる学会誌出版の動き

著者は次の3つのプロジェクトに係わってきた。

1) 情報知識学会誌(1990年12月刊行)の作成

2) SGML実験誌プロジェクト^{*)}(1990年4月-1991年3月)への参加

印刷体だけでなく、CD-ROM版も作成。

3) 日本化学会の論文誌全文データベースWG(1990年10月設置)への参加

これらについて簡単に紹介すると共に、その経験を基にして、SGMLへの一層の期待を述べ、また、SGML関連ツールの充実と普及を要望したい。

2. 情報知識学会誌の作成¹⁻³⁾

これは、SGMLを使って作った学会誌のおそらくは最初のものであろうが、次に示す特徴を持っている。

1) 貼込みなしの完全電子出版印刷物

・ 大部分の表や簡単な図はLaTeXで作成。

・ 複雑な図表や写真、外字はスキャナーで画像として取り込み、

写植機上で電子的に合成して、文字と同時に印字して版下を作成。

2) プロッピー・ディスクや電子メールによる投稿

・ 投稿の手引により、簡易化したマーク付けを著者に期待。

・ マーク付けのチェックと修正は編集者が行う。

・ これをMark-ITにより、SGML形式そしてLaTeXに変換。

・ 図表の割付などで不都合があれば、LaTeXのコマンドで対応。

3) 理工系・文科系両方の論文

・ 図表の形式、文献や注のスタイルは論文により様々。⇒ DTD設計は試行錯誤。

・ 情報やコンピュータに係わる研究だが、対象は原子炉材料からインド文字認識、知的所有権、SGML形式による源氏物語の全文データベースまでと多彩。

^{*)} 学術情報センター・凸版印刷・図書館情報大学の三者共同研究プロジェクト

なお、出席者の理解を助けるために情報知識学会誌を配付し、該当する箇所を示しながら説明した。また、「栞代わりに挟んである封筒は情報知識学会への入会案内です」とさり気なく？入会勧誘発言もしておいた。

3. SGML実験誌プロジェクト⁴⁻⁶⁾

日本の各分野の学会誌10誌（英文誌7件、和文誌3件）から、許可を得て論文を一つずつ採り、SGML方式による実験誌とCD-ROM版を作成した。収録した論文のタイトルと学会誌については、添付資料のSGML実験誌の表紙のコピーを参照されたい。

作成工程は概略つぎのとおりである。

1) 各種学会誌における論文の要素、スタイルの分析

2) 学術論文（和文・英文）のための DTD の設計

3) 試験用論文データの取得

学術情報センターの学術論文データベースから複写。一部はパンチ入力。

4) DTD に則したタグを挿入して、SGML形式に変換

5) 実験誌印刷形式(LaTeX) に変換

6) スキャナーによる図表などの入力

7) LaTeX による実験誌の印刷

8) CD-ROMにおける検索仕様の設計およびSGML形式からの変換

9) CD-ROMの作成

CD-ROM版SGML実験誌には、本文だけでなく図表も含めて全ての情報が納められている。また、本文から図、表、参照文献への相互リンクも付けてある。CD-ROM版SGML実験誌の検索ソフトウェアは、凸版印刷(株)のCD-ROM専用マルチメディア検索ソフトウェア「竹簡」を本プロジェクトのために改良したものである。このソフトウェアは、先に述べた相互リンクを使ってハイパーテキスト的な検索をすることができるようになっている。勿論、タイトル中のキーワードや著者名からの検索も可能である。

4. 日本化学会の論文誌全文データベース・プロジェクト

日本化学会では現在 CTS方式によって論文誌を印刷しているが、SGMLを導入して全文データベースを作成し、それから印刷する方式が検討されている。ここで検討されている問題は次のようなことである。

・化学特有の問題への対応が必要 — どこまでやるか。

化学構造式（亀の子） — 画像としてスキャナー取り込み

上付下付 — たとえば、 ^{235}U では上付は後ろのUに掛かり、 H_2O_2 は前のHに掛かる。このような単位を意識するか否か。

・SGMLとして表の構造をどこまで意識するか。

・毎月250頁を越える欧文誌を出版するためには、大量処理への対応が必要である。

・価格と納期の問題 — CTSより安く、速くできるか。

・学会の編集担当者と印刷会社の仕事の割り振りをどうするか。

編集担当者はコンピュータ操作的な仕事はやりたがらないことが多い。

5. SGML懇談会への期待と要望

5. 1. SGMLのCD-ROMやハイパーテキストへの適用への期待

SGMLには次のような期待が持てる。

- ・構造を意識した検索 — SGMLに対応するSQL
- ・フルテキスト・サーチ
- ・図表・参照文献の参照／逆参照
- ・図表・画像は勿論、動画も可能
- ・保管スペースの節約
- ・手元に置けるようになる

5. 2. SGML懇談会への要望

1) DTD は試行錯誤となる。それに対応しやすいツールが必要。

- ・学問分野ないし学会特有のスタイルがある。⇒学会ごとに DTDが必要かも。
参照文献のみのもの、文献と注を一緒にしたもの（たとえば、『これに関する研究としては、D. Smith: "....." や H. Tanaka: "....." などがある。』といったもの。
- ・文献リストの表現でも、論文、単行本、プロシーディング、その他（たとえば、マニュアル）によって形式が異なる。これらの種類を一々区別するのは実際問題として面倒。
- ・SGMLの観点から見れば、学会誌の形式はかなり自由。
- ・論文査読は内容について行われるのであって、形式は気にされていない。
- ・一度決定されたDTD でも、変更は起こりうる。

2) SGML形式への変換・チェックの容易なツールが望ましい。

- ・フロッピーや電子メールによる投稿は時代の趨勢。
- ・著者にSGMLを意識させるのは困難。どこまで期待できるか。
- ・図表や文献の参照は著者に指定してもらった方がよい。
英国化学会論文誌の投稿規定案
- ・エラーがある度にそこでチェックが中断するのではやりにくい。
以前は中断していたソフトウェアMark-IT は、最後までチェックするように最近改良された。

文献

- 1) 情報知識学会誌, Vol. 1, No. 1, 情報知識学会, 1990年12月, 98p.
- 2) 石塚英弘: SGMLによる情報知識学会誌の編集印刷について, 情報知識学会誌, Vol. 1, No. 1, p. 24(1990).
- 3) 平澤道彦, 坂田英俊: 情報知識学会誌の制作現場からの報告, Information & Knowledge News (情報知識学会ニュースレター), No. 7, p. 2 (1991.4)
- 4) SGML実験誌, 1991, 学術情報センター, 1991年3月, 76p.
- 5) SGML実験誌 CD-ROM 版, 1991, 学術情報センター, 1991年3月
- 6) 根岸正光: 「SGML実験誌」の出版について, SGML実験誌(1991)の前書き, 1991年3月

新刊紹介

名和小太郎著 『電子メディアとの交際術』^{*)}

この本は、20世紀末の電子メディア環境—とくにコンピュータ利用環境—について、著者が経験したこと、考えたことを文章にしたものである。彼がこれまでに書いたエッセイのうち、このテーマに関するものを集めて本にしたので、一つ一つが短く読みやすい。そのため、忙しいビジネスマンが乗物の中で読んで、この方面の知識を得るのにも適している。また、情報やコンピュータ利用環境のただなかにいる人が読めば、いろいろと思い当たる点が出てきて、頷いたり、ニヤッと笑ったり充分楽しむことができるだろう。

構成は、1. 電子メディアと暮らす、2. 電子メディアを読む、3. 電子メディアを案ずる、4. 電子メディアと遊ぶ、5. 電子メディアを論じる、の5つに分かれていて、その中に3～5ページ、稀には7ページのエッセイが多数収められている。

何れのタイトルも洒落ている。たとえば、1. 電子メディアと暮らすの中から挙げれば、『お気に召すま—ワープロvsキャッシュ・ディスペンサー』『あなたなしには—バックアップvsセンサー』『そして誰もいなくなる?—ファイルvsパイル』『就職試験必勝法—試験官vs人工知能』『会議は踊るか?—紙vsOHP』『東京でゴドーを待つ—渋滞vs自然の運行』『どんなに上手に隠しても—セキュリティvs暗証』などといった具合である。

また、2. 電子メディアを読むの中には、『高度情報化社会をパラフレーズする』『ハレー彗星人のみた情報社会』『戦略情報システムで踊ろう』『情報のプロとアマ』などがあり、3. 電子メディアを案ずるの中には、『技術が走り、制度が追う』『大衆の感性と専門家の論理—コンピュータ・リテラシーをめぐって』『交替する主役—技術者から法律家へ』『情報公開vsフリー・ライダー』『プライバシー保護vs信用取引』などがある。

4. 電子メディアと遊ぶには、『形式と美学—クセナキスのばあい』『衣装デザイン事始め』が、そして、5. 電子メディアを論じるには、『電子時代のお布施理論—梅棹理論を読みなおす』『データベース—売れる条件』『マルチメディアの著作権』『ブラックボックスの統計制度』『納税者番号制度にかんする思考実験』がある。

勿論、洒落ているのはタイトルだけではない。文章自体も軽妙洒落で、対照の妙を感じさせる整理の仕方である。それらは、著者の広範な知識と深い洞察力に基づいているのであろう。そして、底に流れるのは東京人の洒落っ気であろうか。それにしても読者を飽きさせないのは、やはり才能というものであろう。

著者の名和氏については、情報分野で著名な方なので紹介の必要は無かろうが、工学博士で、旭リサーチ・センター取締役の傍ら、この10年間に500編のエッセイを書かれたそうである。著書としては、『変りゆく情報システム部』(企画センター、日本経営協会文献賞)、『電子仕掛けの伸—法制度を揺るがす情報通信技術』(勁草書房)、『技術標準対知的所有権』(中公親書、日本企画協会文献賞)などがある。また、情報知識学会誌創刊号には講演『情報知識と知的所有権』が載っている。

ところで、この本の『あとがき』に「著者は、この20年間にわたり情報システムの分野で仕事をしてきた。だが、本年中にたぶん転向することになる。この意味で、この本は著者にとって一つの中仕切りになる」とある。情報システムの分野から離れてしまわれるのは残念なことだ。離れてもなるべく近くに居ていただきたいなどと思われる方は多いだろう。(図書館情報大学 石塚英弘)

^{*)} 勁草書房、1991年4月刊、ISBN 4-326-65124-5、定価2,163円

ウィトゲンシュタイン・テキスト・データベース を試用してみて

征矢直樹（成城大学大学院）

さる5月18・19の両日にわたって開催された第三回ウィトゲンシュタイン・シンポジウムにおいて、テキスト・データベースについての講演及び実演会に出席させて戴く事ができた。本稿は、それにかかわる感想と希望である。

まず、極めて便利なものが実用化されたとの印象が素朴な感想である。

ウィトゲンシュタインのテキストについては、未だ索引の編集などは十分に行われてはいない。僅かに『論理哲学論考』、『哲学探究』の二主著においてのみ流布されているのが現状である。現代哲学の著作としては詳細な文献学的研究が割合多くなされている事を考えるならば、このデータベースの持つ意義は少なくない。試用会場で早速、同シンポジウムでの講演者が、講演に関係した語句を検索・確認していた事が象徴的であった。

テキストの殆どが断片から構成され、通常の体系的著作と比して内容の把握が難しいウィトゲンシュタインの研究にとって、発言の取りこぼし・見逃しをなくするこのソフトは極めて有益である。

又検索以外でも、研究論文等の参照箇所の際合にこのソフトを使用したい。版の間で大幅に頁数の異なる場合、若しくは頁数でなく節の番号で指定された場合など数十頁も操らねばならない場合がある。このソフトの使用はその種の手間をも大幅に縮小するのではないか。

何れにしろ、早速利用したいとの欲求をかき立てられるに十分なソフトではあった。

だが、ユーザーとしての立場から贅沢を言わせて載くならば、多岐に渡る改善を期待したい。

まず、ぜひ実現化して載きたいのは、引用箇所をもっと長く見れるようにする事である。現在のソフトでは、普通のコンコルダンス同様、当該語句を含んだ一行（以下）が表示されるのみである。だから、せっかくコンピュータで出現箇所を知っても、そこが何について述べられているかはテキストを開いてみなければわからない。これでは出

現頻度の高い語（句）から必要な部分のみを選出する場合、多大な手間を要するのである。この点ではコンコルダンスを引くのと本質的な違いがなくコンピュータを使用するに於ては不満感が残る。従って、前後をスクロールできる等、「読むテキスト・データベース」化して載けたら幸いである。

さらに、指定した箇所を、総て前後をも含めて打ち出してくれる等の機能を持つならば、カード作成の手間も省けるのでいうことがない。

これと並ぶ問題点は、諸版間の対照である。

まず、翻訳と原典との対訳化を施して載きたい。特に、オリジナル・テキストの大部分が独語であるにも拘わらず、主流の研究用語が英語であるウィトゲンシュタインについていえば、検索一つするのにも一々独語版を参照してからでなければ人力できない、というのは非常に不便である。

又異版間・訳本間の対照もできると便利である。

更に、オリジナルのみではなく、注釈や参照箇所の指示、その部分を扱った論文への言及等があると、多角的に用いえるように思う。

加えて、頁と節との対照は、是非とも表示していただきたい。英語での研究著作は英訳の頁数で参照箇所を指定する慣習から、オリジナルの対応箇所を捜し出すのに苦勞する場合が多い。同様のことは、版の間での対照についても言える。『数学の基礎』は、第二版までと第三版とで「部」の数すら異なる。だから、現行ソフトのように原語のみで断章番号若しくは頁数の何れかのみが表示されるのではなく、少なくとも主要諸版（訳）総ての頁数（及びある場合には断章番号）の並記ができないだろうか。更に、その関係の参照表の様なものが画面に表示できるならば、とても助かるのである。このデータベースを、語句索引としてだけでなく、参照箇所を発見する為の装置としても使用するためには、英独両語間の関係がわかるように是非ともして載きたいのである。

以上、コンピュータのことを全くわからぬ素人が勝手なことを述べさせていただいた。現在の段階では、一般に普及させるものとしては過大な要求をもしたのかもしれない。しかし、以上に挙げた事の一部でも実現していただけたなら、ウィトゲンシュタイン研究が、はるかに少ない手数ででき、より本質的な問題に集中できるように思う。

コンピュータと数学教育

東京女子大学文理学部 杉山真澄

数学教育の目的目標は、数量、図形、関数等についての理解を深め、それにより情報の判断、整理、処理能力の育成にある。昭和63年の学習指導要領の改訂により、数学の学習が単に知識の習得や技能の習熟にとどまることなく、学習することのよさや楽しさが分かるように、自ら学習していこうとする意欲と主体的に活用しようとする態度を育てることそして、積極的にコンピュータを導入することとなったのである。コンピュータを数学教育の中に取り入れる方法として

- a. コンピュータを動かすために必要な数学を指導する
- b. コンピュータを使って数学の考え方を理解させる
- c. コンピュータによって指導した内容を定着させる

の3つがある。コンピュータを教具として、教師の教育機能を補い、また生徒の理解を助け、思考力を鍛え、創造性を発揮させるためには、どのようにしてゆけばよいか。教育は単に知識を教授して記憶させるだけでなく、理解する、他の考え方を探す、比較する、使ってみる、書いてみる、説明するなどを通して、考えさせる力を育てることが大切である。教え込み型のCAIは、考えることよりも正解を得ることだけになり思考力を開発することにならない。また日本でCAIが広く普及しない背景には、一斉授業という教育風土、教員の質の高さ、費用の問題がある。CAIを個人用、遅れた生徒に有効な教具として使っているが、学力差、進度差を埋める効果がでておらず、また現在の個別指導型のCAIは学習していく筋道や順序が整いすぎているため、次第に

受け身的学習となり思考力を開発するにいたらない。自らが道順を見つけ、方法、道具を選び問題を解決していくような学習指導が必要である。

以下において数学教育とコンピュータとの諸々の問題について検討してみたい。

(1) コンピュータは数学教育のどこに利用できるか

それは四則計算、累乗、一次方程式、連立二元一次方程式、連立三元一次方程式の解法、整関数の値、平方根、一元二次方程式の解法、逆関数、対数、階乗、順列、組み合わせ、数列、級数、ベクトルの内積、行列の計算、三角関数の値、関数の変化率等である。

(2) コンピュータの利用により数学教育はどう変わるか

これまでの数学は、どうすれば簡単になるかの為の方法や公式の開発、どうすれば早くできるかのためのうまい計算法の発見、すべての場合を調べるのは大変だからその代表としてどのような場合を選ぶか、そして公理、定義から論証を演繹的に組立てて定理を導く、というスタイルで、それに対してコンピュータの使えるこれからの数学は、計算は面倒でもよい、特にうまい方法は必要としない、場合の数が有限であればその全部を調べつくして検証、画像処理により容易にイメージ化、疑似乱数の発生等により実験実証、というスタイルとなる。

(3) 具体的にはどう変わるか

数、式の分野では、2進数で表記されることにより小数、分数が循環小数に成る場合があり、このときどこかで四捨五入が行われるために、誤差が生じる。従って、有効数字の桁数、四捨五入の問題、誤差近似の考えが必要となる。

論理計算を電気信号に変えることからブール代数、数値の計算に関係することから対数が重要となり、三角関数の加法定理、3倍角の定理などの式変形の価値は低くなる。

関数、グラフの分野では、コンピュータによりグラフを描くことは手作業と異なり、コンピュータが関数として持っているものであれば、どのようなグラフも描く手間は同じである。これまでの式変形や、微分などを使って手作業によりグラフを描くことと、コンピュータの画面に必要なグラフを描くことは全然意味が違う。

微積分の分野では、面積体積の計算が公式によるのではなく区分求積法などで近似解として求める。

確率・統計の分野では、これまで階乗、順列、組み合わせを小さい数の場合についてのみ実際の数値で求めて、あとは式で表現して終わりとなっていたのが、具体的に数値として表示される。

大数の法則がコンピュータによる模擬実験により実証可能となり、正規分布は n を大きくしたときの二項分布に近似可能、というように理論的に考えることより、実際の数値を出して見ていくこととなり理解しやすくなる。検定では、5%の危険性がよく使われてきたが、危険性を何%にしてもすぐ計算できる。

データが多量であっても計算が簡単であるため代表値、平均値、標準偏差な

どの持つ意味、大切さがよくわかる。

(4) コンピュータ利用教育で何を留意すべきか

*** 生産蓄積処理型のコンピュータ教材**
生徒の実態をよく把握し、教育内容を分析して、教材編成する必要がある。教育情報メディアには

1. 情報伝達型
2. 情報パッケージ型
3. 生産蓄積処理型

の3種があるが、授業において教師が素材となる教育情報を加工し、自分用の情報に作り替えて利用することのできる生産蓄積処理型が有効である。コンピュータの利用は便利で効率がよいが、便利さや効率化だけの追求は考えることをしなくなり、人の能力の低下につながり教育的効果はかえってなくなる。

*** ワークブックの併用**

CAIは、受け身の“見る”だけでまた機械的な繰り返しは飽きるので、自分の字で書くという能動的なワークブックの併用が必要である。

*** 適切な評価**

習熟を目的とする学習や技能訓練において、過去の点数が良い悪いということより現在の状態が良くなっていくことが大切で、最近の結果を重視した評価、最近のものに重みをつけた加重平均的な評価を与えることが必要である。

*** 適切な時間管理**

適当に時間を制限することは、学習の進行に適度な促進刺激となり教育効果が上がる。

(5) どうすればよいか

教材用ソフトを自分で作成、既成のソフトをそのまま利用、既成のソフトを利用し再編成のいずれかであるが学習ソフトの収集・提供システムとして

- ・ 学習ソフトウェア情報研究センター
〒150 渋谷区恵比寿西1-30-16
代官山佐川ビル
Tel 03-3464-1980
- ・ コンピューター教育開発センター
(CEC)
〒105 港区虎ノ門1-23-11
寺山パシフィックビル
Tel 03-3593-1802

- ・ 国立教育研究所教育情報センター教育ソフト開発研究室
- ・ 岐阜大学カリキュラム開発研究センター
- ・ CBI研究会(東京)

等がある。CECの中に300本余りのソフトを収容している教育用ソフトウェアライブラリがあり、また463種収録した「教育ソフトウェア便覧」も出版されている。

1984年CAI学会の評価案作業部会が「パソコンCAI学習ソフトウェアに関する品質評価基準」という、開発者、利用者のためのチェックリストを発表している。

電子化辞書リスト

1991 Spring (現在商品化され入手可能なもの)

- 1.American Heritage Dictionary of the English Language
- 2.Bauer-Arndt-Gingrich-Danker, Greek-English(Early Christian Greek)
- 3.CED
- 4.COBUILD
- 5.Collins Concise Dictionary
- 6.Collins English Dictionary(original ed.)
- 7.Collins English Dictionary
- 8.Collins GEM
- 9.Comunicacion Y Calculo S.A., Dictionario de Medicina Marin(Spanish)
- 10.Davidson, Hebrew-English
- 11.Estienne, Lingae Latinae Thesaurus
- 12.Estienne, Dictionarium latiogallicum, 1552(Latin-French)
- 13.Garzanti, Italian
- 14.Gage Canadian dictionary
- 15.Harrap Multilingual CD-ROM dictionary
- 16.Irish Gaelic-English Dictionary
- 17.Jiyu-kokumin-sha, Fundamental Dictionary of Contemporary Words and Usage
- 18.Jones, English Pronouncing Dictionary
- 19.Liddle-scott,, Intermediate Size Greek-English Dictionary
- 20.Lo Scaffale Elettronico: Italian -English and Italian-French dictionary

- 21.Longman Dictionary of Contemporary English
- 22.MacBain, Etymological Dictionary of the Gaelic Language
- 23.Macquarie Dictionary(Australian English)
- 24.Macquarie Thesaurus
- 25.McGrqW-Hill CD-ROMbnScience and Technical Reference Set(concise)
- 26.McGrqW-Hill CD-ROMbnScience and Technical Reference Set
- 27.Merriam-Webster 9th New Collegiate dictionary
- 28.MRC Psycholinguistic database
- 29.New Bartlett's Familiar Quatations
- 30.Newby, Greek-English
- 31.Nicola Zanichelli Editore, Italian
- 32.Nicot,French
- 33.Oxford Advanced Learner's dictionary(untagged)
- 34.Oxford Advanced Learner's dictionary(tagged)
- 35.Oxford Advanced Learner's dictionary(parsed and tagged)
- 36.Oxford Advanced Learner's dictionary(extended)
- 37.Oxford Dictionary of Current Idiomatic English
- 38.Oxford dictionary of Music
- 39.Oxford dictionary of Quotations
- 40.Oxford English Dictionary
- 41.Pareno & Leed, Russian-English dictionary
- 42.Plena Illustria Vortaro de Esperata
- 43.Random House Dictionary
- 44.Roget's Thesaurus
- 45.Shorter Oxford dictionary
- 46.Smith, Coptic Dictioanry
- 47.Stoer et la , Grand dictionare francois-latin
- 48.Thorndike-Lorge Magazine Count
- 49.VanDale ,Dutche
- 50.Van-Dale, Ductch-English
- 51.Van-Dale,dutch-English
- 52.Vox.Spanish
- 53.Dictionary (Swedish + English, Russian,Norwegian, Finnish,Spanish,Danish,French,and German)
- 54.Walters Lexicon
- 55.Webster's new World Dictionary
- 56.Wiley, International Dictionary of Medicine and Biology
- 57.Zyzomys

ACH(Association for Computers and Humanities) 提供

学会紹介「記録管理学会」 The Records Management Society of Japan

安 澤 秀 一

「記録管理学会」は1989年03月に設立されたまだ若い学会です。世の中には事務管理とか文書管理またファイリングシステムあるいは情報管理とかシステム管理といった言葉が飛び交っています。しかし「記録管理」というのは耳新しい概念であろうかと思えます。

とはいえ記録とは、媒体上に記録化された情報の集積そのものであり、またその記録化するために、またされたことによって、伝達可能な知識として、体系的に構造化されねばならない情報資源の形成であると考えれば、記録管理という事柄は、情報知識学を支える裾野の一つとみなすことができます。

「記録管理学会」設立趣意書の一節に「記録管理は、記録を作成または収集し、加工・蓄積・組織化し、検索方法を整備して活用し、最終処置（廃棄または永久保管）するという、記録のライフサイクルを対象として統合的な管理をはかる」ことであると、述べております。

日本では明治期以来、官庁・企業などにおいて、「文書課」がおかれ、文書の作成、受信発信、保管などに当たってきました。1945年以降、執務環境や組織環境に大きな変化が現れました。そうした中で、事務の簡素化や改善と効率化が叫ばれ、編冊方式は古めかしいとされ、ファイリング方式の新しさが喧伝されました。しかしその導入に際し、上記の「記録管理」概念から言えば、全体の流れを無視した一点改革主義では、誤解と混乱を生み出すだけであった、と云えそうです。

記録管理学会に集まった人々は、一点改革主義つまりファイリング方式導入に際しての、

目先だけのご都合主義の愚を排して、記録というものの果たす記憶装置としての機能を十全に果たせるような全体的なシステムを構築するための方法と技術を模索しようとしていると、云えましょう。

記録管理学会は学会機関誌として「レコードマネジメント記録管理学会誌」を、隔月に刊行し、すでに9号を数えております。また月例の研究見学会によって、実務の現場から学ぶことも活発に行っております。さらに年次大会を1989年12月（明海大学）、1990年05月（青山学院女子短期大学）、1991年05月（姫路独協大学）と3回、開催しています。大会での研究報告テーマを紹介して関心の所在を確かめて見ましょう。

1991年度大会では、学会自体のプロジェクト企画として実施した「記録量の実態調査」壺坂竜哉、および「RMSビーぶる（会員プロフィール分析）」門倉百合子の報告に始まり、続いて会員の個別研究報告が行われた。「わが国のオフィス環境におけるレコードマネジメントの実態」末広恒夫、「秘書業務における名簿管理（名刺管理システム）」杉田乾伍、「パソコンを利用したファイリングサポートシステム」池田 宏、「ファイリングシステムにおけるパーティカルとホリゾントルの意味」藤本ますみ、「わが国における光ファイリングシステムの利用実態と問題点」高山正也、「金子利八郎の文書管理」福永弘之の6本であった。また記念講演として、神戸大学名誉教授須田 勇氏「脳生理学における言語管理」は参加者一同に深い感銘を与えるものでありました。

1990年度大会での個別研究報告は、「デリヴァリーサーヴィス基盤としての資料管理システム：桐朋学園大学図書館と（株）山種産業の共同プロジェクト」布施芳一・長原 恵、「記録管理とアーキビスト」小川千代子、「電子文書情報管理システム構築のための一提案」玉井祐司、「情報管理者のキャリアブ

ラン」門倉百合子、「記録の管理芥子量保存」佐藤勝巳の5本に加えて、基礎講座「レコードマネジメントの基本」作山宗久であった。記念講演は(株)ワンビシアーカイブズ会長樋口捲三氏「記録・創造・行動」であった。新事業開拓の着眼点が記録管理の重要性を認識したことにあったという講演は、会員を勇気付けるものでした。

1989年度大会は5本の個別研究報告の他に、パネルディスカッション「記録管理学の進路」を、廣田伝一郎、小田島 弘、高山正也、壺坂竜哉、安澤秀一、の5人が語った。熱心な討議があった。また記念講演は、産能大学学長(前東京工業大学学長)松田武彦氏の「組織記憶と記録管理」であった。日本における経営工学の草分けの一人である松田学長の、長年にわたる研究の蓄積と熟成の成果を体系化した講演は、記録管理学そのものの大構想ともいえる内容でありました。

つぎに、「レコード・マネジメント記録管理学会誌」既刊9号における主要な論文・報告などを紹介して見ましょう。

1989-06 1号 「記録管理学を考える」安澤秀一、「灰色文献問題にみるレコード・マネジメントの重要性」高山正也、「記録の価値：その評価基準」作山宗久、「文献紹介上田修一編『情報学基本論文集：情報研究への道』」鈴木雅子、

1989-09 2号 「レコードセンタ その確かめられた考え方ーウィリアム・ベネドン」作山宗久、「文献紹介A. C. ウルフスパーレ『企業記録の管理』ICAハンドブック8」安澤秀一、

1989-12 3号 「記録とアーキヴィスト」小川千代子、「情報センタvs図書館」上野一、「光ディスク・ファイリング・システム」船越幸夫、「文献紹介I. ペン他『記録管理ハンドブック』」安澤秀一、

1990-03 4号 「組織記録と記録管理ー第1回研究大会基調講演録」松田武彦、「徳川期商家之給与・退職積立金および勤務規定」安澤秀一、「文献紹介C. クーチュア『記録書類の生涯ー記録史料および記録書類の管理についての包括的方法』」安澤秀一、

1990-05 5号 「米軍レコードマネジメント・スペシャリスト時代を回想して」東政雄/植村達男、「文書館学=史料管理学への道を歩いて12年」安澤秀一、

1990-09 6号 「記録・創造・行動ー第2回研究大会記念講演」樋口捲三、「文献紹介ー外国の記録管理雑誌から」香流湾夢、

1990-12 7号 「だってあの人たちは自発的参加者打世：諸団体についての考察」アイラ. A. ペン、「ファイリング・システムの確立と維持」栗原正明、

1991-03 8号 「記録管理におけるコンサルタントの役割」坪坂竜哉、「三菱石油株式会社のスッキリ運動」河島正光、

1991-05 9号 「数字式ファイリング・システム：ターミナル・デジット配列法とミドル・デジット配列法を中心として」作山宗久、

なお記録管理学会の国際的協力の一つとして、「IRMCレコード・マネジメント用語集」の翻訳刊行のあることをあげておこう。

IRMCとは、International Records Management Councilの略称である。IRMCの他に、各国にレコードマネジメントについての専門職協会や学会が活発に活動していることを、述べておきたい。

記録管理学会連絡先：

〒249 逗子市久木8-12-11

作山宗久

1992年 情報学シンポジウム 論文募集

——ゲノムと情報科学——

1992年1月8日(水)ー9日(木) 9:30ー17:00

日本学術会議講堂

〒106東京都港区六本木 7-22-34 (地下鉄千代田線乃木坂駅)

目的：科学における情報の円滑な流通と高度利用を促進するため、データ・知識に関する基本的問題とその整備・利用に関する討議を行ない、研究交流をはかる。本シンポジウムは1984年以来毎年開催されている。

内容：“ゲノムと情報科学”の統一テーマに関連するものを望む。

例えば次のようなテーマを含む。

- 1) データベース(DNA、タンパク質)に関する問題や技術。
- 2) 遺伝情報の解析における問題や技術(アラインメント、相同性探索、分子進化解析等)
- 3) タンパク質の構造・機能予測に関する問題や技術。
- 4) アルゴリズム (Genetic Algorithms, Pattern Matching, Clustering等)
- 5) 生命科学から情報科学への問題提起。

<<共同主催>> (予定を含む)

日本学術会議・学術文献情報研究連絡委員会・学術データ情報研究連絡委員会、情報工学研究連絡委員会・情報処理学会・情報知識学会・人工知能学会・日本医学会、日本化学会・日本数学会・日本地理学会・日本物理学会・日本生物物理学会

<<後援>> (予定を含む)

学術情報センター・測量自動制御学会・国際電信電話(株)・情報科学技術協会・情報通信学会・電子情報通信学会・日本医療情報学会・日本科学技術情報センター・日本機械学会・日本金属学会・日本原子力学会・日本材料科学会・日本材料学会・日本生化学会・日本電信電話(株)・日本動物学会・日本農学会・日本分子生物学会・日本分析化学会・日本薬学会・化学情報協会・ICOT

講演申込方法：ワープロ用紙でA4用紙4ー10枚の論文と題目、氏名、連絡先、職名を記入した別紙を添えて下記宛に申し込む。

講演申込締切：1991年9月14日(土)

採用通知：プログラム委員会で審査し、採否は1991年10月1日までに通知する。

最終原稿締切：1991年11月30日(土)

参加申し込み：氏名、連絡先、職名、資料必要の有無を葉書に記入し10月1日までに下記に申し込む(当日受付もあるが資料不足の際は事前登録者を優先する)。

参加費(資料代として)：共催学協会員5,000円、学生1,500円、一般7,000円

宛先：情報処理学会シンポジウム 木村保明

〒106 東京都港区麻布台 2-4-2 保科ビル3F Tel. 03-3505-0505

D i r e c o r y

Computers in Teaching Initiative

(教育 & コンピューティング)

Center for Textual Studies in Oxford 提供

1. CTI Center for Accountancy
School for Information Systems
University for East Anglia
Norwich
NR4 7TJ
2. CTI Center for Biology
Donnan Laboratories
University of Liverpool
PO Box 147
Liverpool
L69 3BX
3. CTI Center for Chemistry
Donnan Laboratories
University of Liverpool
PO Box 147
Liverpool
L69 3BX
4. CTI Center for Computing
Institute for informatics
University of Ulster at Jordanstown
Newtownabbey
County Antrim
Northern Ireland
BT37 0BQ
5. CTI Center for computing in
Economics
University of Bristol
Alfred Marshall Building
40 Berkeley Square
Bristol
BS8 1HY
6. CTI Center for Engineering
c/o CATU
Dept. of Mechanical Engineering
Queen Mary and Westfield College
Mile End Road
London
E1 4NS
7. CTI Center for Geography
(with Geology)
Department of Geography
University of Leicester
University Road
Leicester
LE1 7RH
8. CTI Center for History
History Computing Laboratory
University of Glasgow
2 University Gardens
Glasgow, G12 8QQ
9. CTI Center for Human Service
Dept. of Social Work Studis
University of Southampton
Southampton
SO9 5NH
10. CTI Center for Land Use Studies
Department of Agriculture
University of Aberdeen
581 King Street
Aberdeen
1B9 1UD
11. CTI Center for Law
Faculty of Law
University of Warwick

Coventry
Warwickshire
CV4 7AL

Lancaster University
Lancaster
LA1 4YW

12. CTI Center for Library &
Information Studies
Dept of Library & Information Science
Loughborough University of Tecnology
Loughborough
LE11 3TU

18. CTI Center for Physics
Department of Physics
University of Surrey
Guildford
GU2 5XH

13. CTI Center for Mathematics &
Statistics
c/o Fucalty of Education
University of Birmingham
Birmingham, B15 2TT

19. CTI Center for Psychology
Department of Psychology
University of York
Heslington
York
YO1 5DD

also at:

14. Department of Statistics
University of Glasgow
University Gardens
Glasgow
G12 8QW

20. CTI Center for Sociology & Social
Policy(with Politics)
Dept. of Sociology & Social Policy
University of Stirling
Stirling
FK9 4LA

15. CTI Center for Medicine
Royal Fort Annexe
Bristol university
Tyndall Avenue
Bristol
BS8 1UJ

21. CTI Center for Textual Studies
Oxford University Computing Service
13 Banbury Road
Oxford OX2 6NN

16. CTI Center for Modern Language
(with Classics)
School of European Languages &
Cultures
University of Hull
Cottingham Road
Hull
HU6 7RZ

22. Office for Humanities Communication
The Library
University of Bath
Claverton Down
Bath BA2 7AY

17. CTI Center for Music
Department of Music

23. CTISS (Computers in Teaching
Initiative Support Service)
University of Oxford
13 Banbury Road
Oxford OX2 6NN

お知らせとお願い

CODATAでは先の第34回Executive Committeeのバリでの会合（平成3年2月9日～11日）で賛助会費を広く募集することになりました。従来迄も同様な会員制度があり、CLASS(B)にはJAICIが、CLASS(C)にはAIRAPT及びJapan Society for CODATA、PIR-International、Taiho-pharm等が加わっています。

CODATAそのものを衆知さすため及び財政上の支援をうるための目的で広くキャンペーンをする事になりました。以下にSecretary GeneralのDr. Goodon Woodの呼びかけ等の英文を掲載します。皆様の御協力を戴きたく存じます。

(CODATA EC member 次田 皓)

An Invitation to become a Supporting Organization of CODATA

CODATA is a Scientific Committee of the International Council of Scientific Unions that is concerned with the compilation, management and dissemination of scientific and technical data. It carries out a variety of activities focused on improving the quality of data and making data sources more accessible to the scientific and technical community. These activities, elaborated in the enclosed brochure, include the development of guidelines for storing and presenting numerical data, the promotion of new databases and networks and the provision of education and training.

The core membership of CODATA consists of 16 international Scientific Unions and the national academies or other adhering organizations of the member nations currently numbering 22. In addition we have a category of "Supporting Organizations" which, in return for modest dues, receive privileged access to CODATA products and Observer status at the bi-annual CODATA General Assemblies. Details are given on the attachment; current Supporting Organizations are shown on the CODATA brochure.

It is a pleasure to invite your organization to become part of this group as a Supporting Organization of CODATA. A positive response will give you a window on CODATA undertakings, including complimentary copies of various CODATA publications and reports. In addition, you will have an opportunity to make suggestions for new CODATA projects.

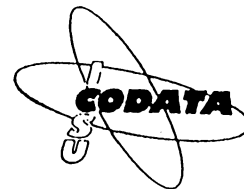
Please do not hesitate to contact me, or the Secretariat at the Paris address shown above, if you would like further information. I hope very much that you will join us in advancing the work of CODATA.

Yours sincerely



Dr. G. H. Wood
Secretary General

Encl.



COMMITTEE ON DATA FOR SCIENCE AND TECHNOLOGY
OF THE INTERNATIONAL COUNCIL OF SCIENTIFIC UNIONS

CODATA Secretariat 51, Boulevard de Montmorency 75016 Paris, France - Telephone: +33 (1) 45 25 04 96 Telex. 630 553 F
Fax: +33 1 42881466 E-mail: OMNET: CODATA.PARIS; BTGOLD: 10075:DBI0010; DIALCOM: 145:CDT0010

CODATA SUPPORTING ORGANIZATIONS
DUES CATEGORIES AND BENEFITS

Any organization concerned with the compilation, evaluation, management, dissemination, or use of numerical scientific and technical data is eligible to become a Supporting Organization of CODATA. This includes profit-making, not-for-profit, governmental, and educational organizations. There are three categories of Supporting Organizations, with dues and benefits specified below:

Category A: Annual dues \$1000

This category is intended for medium and large commercial organizations and government agencies. Benefits include:

- Copy of every CODATA publication, including subscription to the CODATA Bulletin
- Task Group Reports and Minutes (upon request)
- CODATA Special Reports (preliminary documents circulated to a limited audience for comments)
- CODATA Newsletter
- Observer status at the General Assembly

Category B: Annual dues \$500

Intended for small commercial organizations, professional scientific societies, and other not-for-profit bodies. Benefits include:

- Task Group Reports and Minutes (upon request)
- CODATA Special Reports
- CODATA Bulletin
- CODATA Newsletter
- Observer status at the General Assembly

Category C: Annual dues \$200

Intended for data centers and small not-for-profit organizations. Benefits include:

- CODATA Bulletin
- CODATA Newsletter
- Observer status at the General Assembly

Applications may be submitted on the attached form or by letter. The application should indicate which dues category the applicant wishes to be placed in. Information on the major interests of the applying organization would be appreciated.

Upon acceptance of the application, the organization will be billed for the appropriate dues.

CODATA

COMMITTEE ON DATA FOR SCIENCE & TECHNOLOGY

CODATA is an interdisciplinary Scientific Committee of the International Council of Scientific Unions (ICSU) which seeks to improve the quality, reliability, management and accessibility of data of importance to all fields of science and technology.

Objectives of CODATA

CODATA is concerned with all types of quantitative data resulting from experimental measurements or observations in the physical, biological, geological and astronomical sciences. Particular emphasis is given to data management problems common to different scientific disciplines and to data used outside the field in which they were generated. The general objectives are:

- Improvement of the quality and accessibility of data, as well as the methods by which data are acquired, managed, and analyzed.
- Facilitation of international cooperation among those collecting, organizing, and using data.
- Promotion of an increased awareness in the scientific and technical community of the importance of these activities.

Types of Activities

The major classes of activities undertaken by CODATA in addressing the above objectives are:

- Preparation of key data sets for which consistent international use is desirable.
- Coordination of multinational projects.
- Establishment of format standards to promote compatibility of databases.
- Generation of guidelines for presentation of data in the primary literature.
- Supplying of information on sources of reliable data.
- Provision of education and training.
- Organization of conferences and workshops.

Some current CODATA projects

While CODATA conducts a few long-term projects, its normal approach is to catalyze new activities by establishing Commissions and Task Groups which develop the methodology, and sometimes the administrative structure, for a continuing operation or program. Examples of current projects include:

- **Biological Macromolecules** — This project seeks to improve coordination among several hundred institutions that compile protein and DNA sequence data. The Task Group has developed standard formats to facilitate interchange among these data banks.
- **Chemical Thermodynamic Tables** — CODATA has established an effective mechanism for collaboration of thermochemical data centers in five countries. Database formats have been standardized, data are being exchanged in computerized form, and a series of international tables is being published.
- **CODATA Referral Database** — A computer-searchable file of worldwide sources of data in all fields of science has been developed in collaboration with Unesco. This includes data centers, repositories, and other institutions that provide data to the technical community. It is sold in diskette form for personal computers.
- **Fundamental Physical Constants** — A CODATA Task Group of experts in physics and metrology establishes the recommended values of the fundamental constants which are adopted by most national and international bodies.
- **Standardized Terminology for Access to Biological Data Banks** — A CODATA Commission uniting the many Biological Unions and organizations in an effort to harmonize the terminology used in the various biological data banks.
- **Other active or recently-completed projects cover:**
 - Commission on Data for the International Geosphere-Biosphere Program
 - Asian-Oceanic Database Developments and Data Activities
 - Coordination of data banks for properties of engineering materials
 - New perspectives in scientific complex data management

Conference, Workshops, and Training Courses

CODATA organizes meetings to bring together producers and users of scientific data and to provide training in data management. These include:

- The biennial International CODATA Conference, which covers the full scope of CODATA interests.
- Specialized workshops on topics of current interest; recent and planned workshops cover:
 - Artificial Intelligence and Computer Graphics
 - Engineering materials databases and dissemination systems
 - Applications of nucleotide and protein sequence data banks
 - Standardization of environmental monitoring data
 - Geomathematics as a tool for resource assessment
- Training courses on data management and data access, many of which are aimed at technical information specialists in developing countries.

Membership and Administrative Structure

CODATA is composed of four kinds of members viz: National Members, International Scientific Union Members, Affiliate, and Co-opted Members (certain other international organizations).

CODATA is governed by its General Assembly of Delegates, one from each National Union, Affiliate, and Co-opted Member. The General Assembly, which meets every two years, determines the broad policies of CODATA and approves specific scientific activities to be undertaken by Commissions and Task Groups. The CODATA Secretariat in Paris, headed by the Executive Secretary, serves as the communication and coordinating center for CODATA and is the focus of publishing activities.

International and national organizations, as well as industrial and business concerns active in CODATA's fields of interest may become Supporting Organizations of CODATA. Supporting Organizations receive various CODATA publications and reports, and each may be represented by an observer at the General Assembly.

なおCODATAの活動に賛同し支援を御希望の方には応募用紙が日本事務局に届いております。その他、7ページにわたるCODATA出版物の最新リストをご希望の方は下記にお問い合わせ下さい。

住所：〒278 野田市山崎 東京理科大学 生命科学研究所 次田 皓

編集部より：

ニュースレターを各種学会や研究集会のブリテンとして御利用下さい。
出来上り原稿は、オフセット印刷として、そのまま縮小して印刷に回せるよう執筆要項に添った形で、A4サイズの半ページあるいは1ページ単位でオリジナルを御送付下さい。又短いものであればFDで御送り下さってもかまいません。

情報知識学会誌への投稿について (Ver.2.0)

編集委員 芦崎達雄

1988年4月に発足した情報知識学会は1990年12月に第1巻の学会誌を発行することができました。内容は人文科学から自然科学まで幅広い分野を対象としています。

情報知識学会誌の第2巻の発刊に当たって、学会誌の投稿規定について、いくつか説明をしておきます。

本誌は、SGML(Standard Generalized Mark-up Language, ISO規格8879)で編集・印刷を行ないます。SGMLとは、文書情報の国際標準として、1986年10月に国際規格となったものである。SGMLでは必要な限り文字列を要素にグループ分けして、マーク付けし、構造化します。本誌では、標題、著者名、著者所属、要約、本文、文献リスト、注、表、図です。また原稿は、図や表以外の部分については、ワードプロセッサで作成し、そのフロッピーディスクと印字したもの2部を提出して下さい。

投稿を御希望の方は情報知識学会誌のVOL1.N01.P97-98の投稿の手引を参照して下さい。

なお第1巻の内容としては、総説記事として、「情報知識学試論」。講演論文として、「情報知識と知的所有権」。解説記事として、「生物学領域の用語名称委員会について」。報告記事として、「SGMLによる情報知識学会誌の編集印刷について」。論文としては、「構造解析法によるデーヴァナーガリー文字自動認識」、「日本語-英語対照「源氏物語」のテキスト・データベースの作成に関する基礎的研究」、「わが国における海外データベース・サービスの現状報告」、「経営管理を支援する対象駆動型シミュレーションの構成法」、「材料データシステムの統合化」の5篇が発表されました。

情報知識学の対象分野は、下記の通りです。

- ①情報蓄積・情報解析(記述法, 記述性, 同定, 識別, 管理可能性, 信頼性, 評価, 安定性,

など)

- ②情報構造(構成要素間の関係, 分類法, 分類表現, モデル, 自己組織化: 学習, 内包: 総称, 類似性など)
③情報表現, 媒体(言語, 線形, 二次元, 多次元, 加工, 変換など)
④情報流通(標準化, シソーラス, 辞書, 案内, 問い合わせ, 機密, 権利など)
⑤応用(データベース構築, 知識ベースシステム, 管理, 検索, 統合化, 高次利用など)
⑥その他上記の理論, 技術, 応用に関連した課題

また取り扱う学問領域としては、下記の通りです。

哲学, 国文学, 法令, 考古学, 歴史,
経済, 経営統計学, 教育
分類学, 用語, 図書館情報学
物理, 化学, 天文, 地学, 生物, 地理, 数学
医学, 薬学, 体育学
工学, 材料, 宇宙・航空, 制御, エネルギー,
原子力
農学, 環境
芸術, 音楽
画像, メディア, 出版・印刷

原稿は一行23字(全角文字)の30行でお願いします。原稿約3頁で刷り上がり1頁となります。論文は刷り上がり約10頁をめやすとして、原稿で30頁程度お書き下さい。

原稿の締切としては、1991年 9月30日を予定しています。

送付先: 〒100 東京都 千代田区 永田町
2-5-2 日本科学技術情報センター
芦崎 達雄

Tel: (03)3581-6411

Fax: (03)3593-3375

出力形式： ワープロ・A4サイズ

(下記は参考までに「一太郎」の設定です。それ以外の場合は長さを御参照下さい)

左マージン：	20mm
右マージン：	20mm
一行文字数：	88文字（コラムの空間をとると 実際の1段の文字数は20文字です） （「一太郎」以外の場合1段約 7.7cm）
上端マージン：	25mm
下端マージン：	25mm
一頁行数：	42行 （「一太郎」以外の場合1列約 24cm）
頁番号：	付けない
横書き	
袋とじ印刷：	しない
段組スペース	2段〔6〕コラム （「一太郎」以外の場合約 1.6cm）

* 長さは特に指定はありませんが、長くて3～4ページ。（出来れば半ページ、1ページ単位でお願いします）

* 締め切り厳守：奇数月の20日。（なお10月1日発行予定の第10号は都合により9月10日の締め切りとさせていただきますので御注意下さい）

* 下記の事項は必ず原稿に添付してください。（原稿には書き込まないで下さい）

掲載希望日：	第	号	1991年	月	日	発行
氏名：	所属：					
連絡先：〒						
	Tel			Fax		

* 問い合わせ・送付先

〒167 東京都 杉並区善福寺 2-6-1 東京女子大学
情報処理センター 長瀬 真理
Tel: 03-5382-6403 Fax: 03-3395-1377

学会カレンダー (Ver.2.0)

- 第5回人工知能学会、学習院大学、1991,6,25-28
人工現実感とテレプレゼンス国際会議、東京流通センター、1991,7,9-10
次世代言語処理国際ワークショップ、京都市国際交流会館、1991,7,23-24
6th CAP Conference, Southern Connecticut State University, 1991, 8,10-12
NCCV/91, New Haven, 1991,8,12-16
Computational Approaches to Non-literal Language(IJCAI), Sydney, 1991,8,21
International Joint Conference on Artificial Intelligence, Sydney, 1991,8,24-30
Sixth International Conference of ACH, Denmark, 1991,8,28-30
情報処理学会「人文科学とコンピュータ」金沢工業大学、1991,9,6
知識ベースシステム研究会、機械振興会館、1991,9,11
情報知識学会後援「歴史研究と電算機利用」会合、1991, 9,21-22
Quantitative Linguistics Conference(QUALICO), University of Trier, Germany
1991,9,23-27
国際シンポジウム「コンピュータワールド'91」大阪国際交流センター、1991,9,24-25
The Fourth UNB AI Conference, University of New Brunswick, Canada, 1991, Sep.
Computers and Language 1991: Towards 1992, Sheffield City Polytechnic
1991,9,25-27
7th International Oxford English Dictionary Conference, Oxford
1991, Sep. 30 - Oct.1
ACC '91--Australian Computer Conf., Adelaide, Australia, 1991,10,6-10
ACM SIGIR '91, Chicago, 1991, 10, 13-16
人工知能基礎論研究会、CSK情報教育センター、1991,10,23-25
ヒューマンインターフェースと認知モデル研究会、東京、1991,10.23
インテリジェントシステムシンポジウム、大阪工業大学、1991,10,25-26
17th Annual Minnesota Conference on Language and Linguistics, 1991,25-26
ASIS '91, Washington D.C., 1991,10,27
ISS '91--Int'l. Symposium on Supercomputing, 福岡, 1991,11,6-8
第8回色彩工学コンファレンス、科学技術館・サイエンスホール、1991,11,18-19
3rd Conference on Situation and its Application, Oiso Prince, Kanagawa
1991,11,18-21
教育工学関連学会連合第3回全国大会、大阪大学、1991,12.2-4
Computers and Teaching in the Humanities Conference, University of Durham
1991,12,16-19
IEEE Int'l. Conf. on Wafer Scale Integration--1992, San Francisco, 1992,1,22-24
4th Conference on Applied Natural Language processing, Trento, Italy
1992,4,1-3
ALLC-ACH92, Oxford, 1992,4,5-9
ICOOMS '92--Int'l. Conf. on Object-Oriented Manufacturing Systems, Canada, 1992, 5, 4-6
COLING-92, Nantes, France, 1992,6,23-28
International Conference on fifth Generation Computer Systems 1992, Tokyo
IEEE Int'l. Conf. on Robot and Human Communication, 法政大学, 1992,9,1-3

第2回担当者会議（仮称）議事録

日時 : 平成3年5月30日（木）18:00～21:00

場所 : 東京大学山上会館 201号会議室

出席者 : 米田、月見里、藤原、安澤、江成、高橋、芦崎、岩田、長瀬

配布資料: 2-1 第1回担当者会議（仮称）議事録（案）

2-2-1 情報知識学会年間スケジュール

2-2-2 情報知識学会事務委託項目（案）

2-2-3 情報知識学会分担（案）

2-2-4 情報知識学会役員名簿

2-2-5 情報知識学会編集委員名簿

2-3 法人

2-4 法人名簿

2-5 企画委員会 検討報告

2-6 情報知識学会誌への投稿について

2-7 情報知識学会担当委員名簿

2-8 個人会員 & 法人会員

2-9 情報知識学会原簿

2-10 情報知識学会（追加分）

2-11 情報知識学会年間概算費用

議事:

1) 藤原副会長担当事項報告及び討議

2-2-1 情報知識学会年間スケジュール解説。

2-2-2 情報知識学会事務委託項目（案）

会費（名簿作成・管理、会費請求書、会費督促、管理）

総務・会計（予算原案・決算原案作成、会計事務）

上記の仕事を委託したい。

2-2-3 情報知識学会分担（案）解説。

2-2-4 情報知識学会役員名簿 解説。

2-2-5 情報知識学会編集委員名簿。

安澤委員より日本女子大の永村真氏を編集委員に推薦があり了承された。

2-5 企画委員会 検討報告 ニュースレター8号に掲載する。

本学会の発足は日本学術会議によることを考慮し、ツールやメソッドでなく、「情報知識学」そのものについて、討議をすべきである。（似たような学会としては情報学基礎研究会が、あるがこちらは利用する側にたった特定集団が対象）

「価値ある知識とは何か」「情報知識の本質とは何か」「情報知識の魅力を探る」といったテーマでアンケートをとる。

出来ればジャンル別にセミナーをいくつか開く。文化、文明、教養との接点を明確にする必要がある。

- 2-6 情報知識学会誌への投稿について。これまで公募したことはない。送付先を記入してニュースレター8号に掲載。将来的には出来れば年2回発行したい。
- 2-7 情報知識学会担当委員名簿。所属変更等。
- 2-8 個人会員 & 法人会員 復元可能。
- 2-9 情報知識学会原簿。最初に勧誘した個人990名の名簿。藤原委員が中心になってリストを外注などして完成させる。
- 2-10 情報知識学会（追加分）2-4参照。

次回は7月15日（月）18：00～22：00 以上（文責長瀬）

編集後記：

ソフトの中にソーティングという機能があります。ファイルの並べ換えはもちろん、検索したいキーワードの並べ換えなど様々な仕事を行ってくれます。欧文用の文章解析ソフトのなかには、アルファベット順・逆アルファベット順・文字数順等いろいろあり、それぞれ降順・昇順があります。その他、単語を末尾からみた昇順、つまりAで終わる単語はBで終わる単語の前にくるように並べ変える機能がついたものもあります。又インデックスだけでなくキーワードを文脈と一緒にソートする、いわゆるコンコルダンスとしてソートできるものもあります。こうなると選択肢はもっと広がり、キーワードの左側に位置する単語の末尾、あるいは右側に位置する単語の頭にくる文字を比較して並べ変えるなど非常に沢山の機能を備えた物もでてきています。

これについて理系の人から「どうしてこんなに沢山の機能が必要なのかしらん？アルファベット（順に並べるのが一番便利じゃない）」と言われびっくりしてしまいました。あわてて「例えば詩の韻の研究、言語学での接尾語研究、文法学での語根と変化形の研究、語彙研究にも使われていますよ」と答えたのですが……。こういった日常レベルでのクロス・オーバーがもっと必要なのではないかと痛感した次第。

なおウィットゲンシュタインのテキスト・データベースのシンポジウムの記事との関連では、NECパソコン販売推進本部サービス部支援課よりデモ用にNEC 9801RA5を4台貸りることが出来ました。責任者の菅喜一郎氏に、主催者に代わり御礼申し上げます。文科系のこの種の研究集会に企業からの援助が得られたのは初めてのことであり、画期的な出来事となりました。

本号では様々な分野の方にご執筆頂き、どうもありがとうございました。編集部を代表し厚く御礼申し上げます。今後も皆さんの御意見をどしどしお送り下さい。

それでは良い夏休みを！！

長瀬